

「開館60周年記念 コレクションの歩み展Ⅰ」によせて

開館60周年に種田虎雄氏を思う

友の会の皆様には、いまさら申し上げるまでもないことですが、当館は、1960年10月に、近畿日本鉄道株式会社の創業50周年記念事業のひとつとして開館した美術館です。そして今年、2020年に開館60周年を迎えることになります。それを記念して、この春には、二つの開館記念展を連続して開催します。

そのうち、4月12日に開幕となる「大和文華館開館60周年記念コレクションの歩み展Ⅰ」は、60年前にタイムスリップして、当館の開館式当日の会場をそっくりそのまま再現する展覧会です。昨年、学芸部内でこの計画を立て、当時の展示資料を見返したときに驚かされたのは、当館の顔であり、核となる主要な作品が、ほとんどすべて開館当初にそろっていたことでした。

むろん、矢代幸雄初代館長が、開館に先立ってコレクション収集につとめていたこと、とくに、原三溪の収集品のなかから、まさに珠玉のような作品群をまとめて購入していることなど、数多くの記録や資料を読んで承知していたとはいえるものの、60年前の展示場に並ぶ作品の豊かさは、まさに圧巻というほかありません。それを再現するこの展覧会では、当館が誇る国宝4件すべてと、多くの重要文化財が一堂に会することになります。

ところで、60年前の開館式当日に、式に先立って執り行われたセレモニーがありました。それは、蛙股池をのぞむバルコニーに面した一画で行われた、朝倉文夫作「種田虎雄氏胸像」の开幕式でした。この銅像は現在もまったく同じ位置に置かれ、バルコニーの日除けスクリーンが降りていないときは、眼前にひろがる蛙股池を眺めています。腕組みして悠然と、すこしまぶしそうな表情で遠くをみつめる姿は、まさに時を超越しています。像

の背中には、「文夫作」と、作者直筆の堂々たるサインも刻まれています。

こうした銅像は、いつしか建物の一部となってしまいます。目に入っても、見えないものであるかのように、静かにそこに存在する、というふうには。

そんななか、例外的にこの像に関心を示すのは、鑑賞授業で来館する小学生たちです。この人は誰？と問われれば、この美術館を建てることを最初に考えた昔の近鉄の社長さんだよ、と教えていたが、そのたびに、そんな説明ですませてよいわけがないという思いが、ちくちくと胸にささっていました。60年間ずっとこの美術館に居続けることは、もちろん生身の学芸員にできることではありません。銅像の下に銘板には、「輝かしい君の遺顔を永久に伝えんとするものである」という文言が、種田氏の後に近鉄社長となった佐伯勇氏によって刻まれています。

そこで、60周年記念展開催の前に、おそまきながら鶴見祐輔著『種田虎雄伝』（近畿日本鉄道刊、非売品、1958年）をひもときました。

種田氏(1883～1948)は、一高・東京帝大卒、鉄道省に入って静

岡駅の助役という現場からそのキャリアを積み上げ、やがて「鉄道省の種田か、種田の鉄道省か」といわれるまでになります。しかし、政局の動揺のあおりを受け、42歳で鉄道省を辞職して、近鉄の前身、大阪電気軌道株式会社の専務取締役役に着任し、東京を離れ関西に移ったのです。それから20年にわたって、近鉄の鉄道事業の礎を盤石なものとししました。

その生涯を描いた伝記なのですが、意外にも、功なり名を遂げた人のあつぱれな一代記風のものではありませんでした。ここに書かれているのは、公私にわたる苦渋に満ちた思いを胸底に深く量みながら、社会とその未来を考え続けた人の歩みのように、私には思われました。

常に、公共の利益を考え、社会への貢献や利益還元を念頭に、種田氏は近鉄という会社を率いました。近鉄沿線の奈良、京都、大阪を日本人の魂の故郷と呼び、そこで事業を行う実業家として、利益にはならずとも日本文化を護る仕事をするので、故郷にお返しをしたいと考え、構想されたのが大和文華館でした。

種田氏はほかにも大和路叢書の出版や、数本の文化史映画も

制作しましたが、どこにも近鉄の宣伝を入れていません。そのことがかえって近鉄の懐の深さを示す大きな宣伝、鶴見氏の表現を借りれば「いわば大衆的宣伝となること」を、種田氏は知っていたのである、ということのようです。そして、美術館事業を「会社の当面の政策によって文化事業をしぼることがなく」、「自分個人の思想傾向によってこれをしぼることもなかった。このことは金持の普通なしあたわざることである」と、鶴見氏は結びます。

リーマンショック以来、忘れられた言葉となってしまいましたが、いわゆる「メセナ（企業の社会貢献）」の早期の事例となりましょう。

ともあれ、この本を読んでから、展示場で銅像の前を通るたびに、少し、緊張するようになりました。種田氏が、腕組みを解いてむっくりと立ち上がって、展示場をゆっくりと一巡したら、さて、なんて言われるだろうかと。（泉万里）



種田虎雄氏胸像 朝倉文夫作



「種田虎雄伝」見返し「杜若図」小林古徑筆

地味な色のクロス貼り装丁の本ですが、表紙を開くと、小林古徑(1883～1957)が描いた鮮やかな藍色の杜若の絵が読者の目をとらえます。

季刊 美のたより No.210

令和2年4月4日

発行 大和文華館